

ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

ヒラメは白身の高級魚として有名で、成長が速く、大きくなることから、高知県では年間 30 万～70 万尾の稚魚が放流されています。釣りのターゲットとしても人気が高く、旬の時期は冬です。ちなみに、高知県でよく「かれい」と呼ばれる魚は、目が左側にあるタマガンゾウビラメやタイワンガンゾウビラメで、ヒラメの仲間です。



生物特性

ヒラメは雄と雌で大きさが異なり、オスよりもメスの方が大きくなります。年齢、全長と体重は、1 歳（雄／雌）が 27／27cm（200／200g）、2 歳が 39／42cm（600／800g）、3 歳が 47／53cm（1,000g／1,500g）、4 歳が 51／60cm（1,400／2,200g）、5 歳が 54／64cm（1,600／2,800g）となっています。ただし、個体による成長差が大きく、成長が速い個体は 2 歳で 1kg を超えます。高知県水産試験場で測定された最大のヒラメは全長 91cm、7,930g の雌で 12 歳でした。

高知県周辺海域に生息するヒラメは 2 歳以上で成熟します。高知県での産卵期は生殖腺指数（GSI）が上昇する 12～4 月で、その盛期は 2～3 月上旬です（図 2）。3～4 月になると、約 2cm の稚魚が水深 1.5m 前後の浅い砂浜海岸に多く出現し、そこで約 5～10cm まで成長します。

高知市沖では、30cm 以上のヒラメが水深 10～20m で、40cm 以上が水深 40～50m で多く漁獲されることから、成長とともにより深い方へ分布水深を広げながら生活していると考えられます。

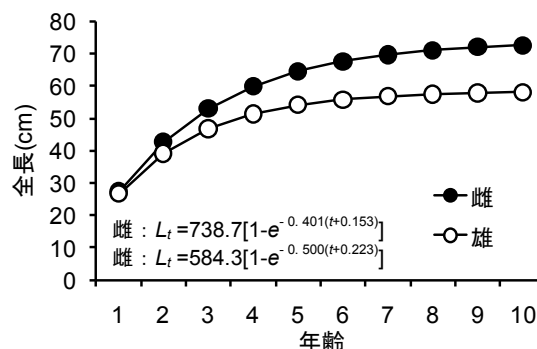


図 1 高知県産ヒラメの年齢と全長の関係。

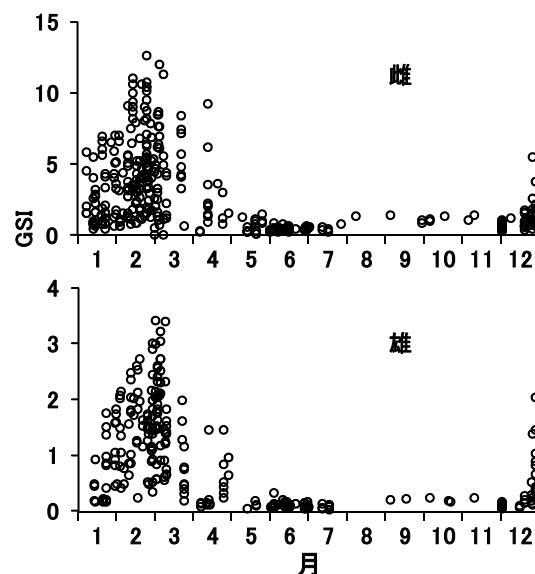


図 2 高知県産ヒラメの生殖腺指数（GSI）の推移（平成 10～17 年）。

資源動向

高知県で漁獲されるヒラメは北限を和歌山県、南限を鹿児島県大隅半島とする太平洋南部系群に含まれます。ヒラメ太平洋南部系群の漁獲量は、平成8年（1996年）にピークを迎えた後、減少しましたが、平成15年（2003年）から平成19年（2007年）までは上昇したことから、平成19年度（2007年）の資源評価では、水準は「中位」、動向は「増加」傾向と判断されました。その後、ヒラメ太平洋南部系群の漁獲量は減少し、平成21年（2009年）の漁獲量は過去10年間で最低であったことから、現在のヒラメの資源状態は良好ではないと考えられます。

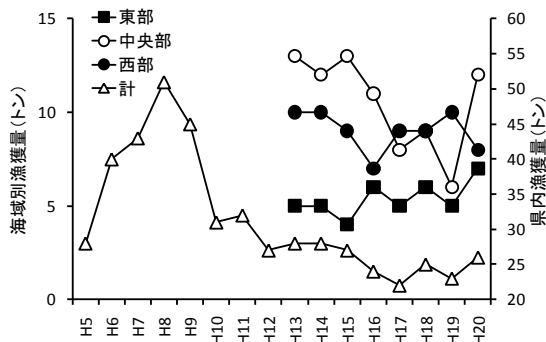


図3 高知県のヒラメ漁獲量（平成5～20年）.

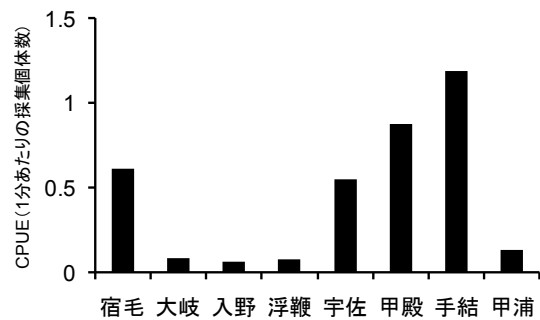


図4 ヒラメ稚魚密度(CPUE)の地域差(平成16～22年).

県内の漁獲動向

高知県のヒラメ漁獲量は、ヒラメ太平洋南部系群と同じく、平成8年にピークを迎えた後、大きく減少し、最近では低水準で推移しています（図3）。この原因は、ヒラメが多く漁獲される県中央部（香南市～四万十町）の漁獲量が減少したためです。

ヒラメ稚魚の出現量を地域別に比べると、中央部が多く（図4）、中央部にヒラメが多いことを裏付けています。また、宿毛湾もヒラメ稚魚が比較的多く見られますが、出現時期は、中央部が3～4月に多いのに対して、4～5月に多いことから、土佐湾に出現する群とは別と思われます。

ヒラメは地域や漁法により漁獲される大きさや放流魚の混獲率が異なります。漁獲の主体は45～50cm以下の1歳、2歳魚で（図5）、産卵期である12～4月が主漁期となります。放流魚の混獲率は中央部で30～50%、県東部と西部で60～80%と、天然魚の分布量が少ない海域で高くなっています。

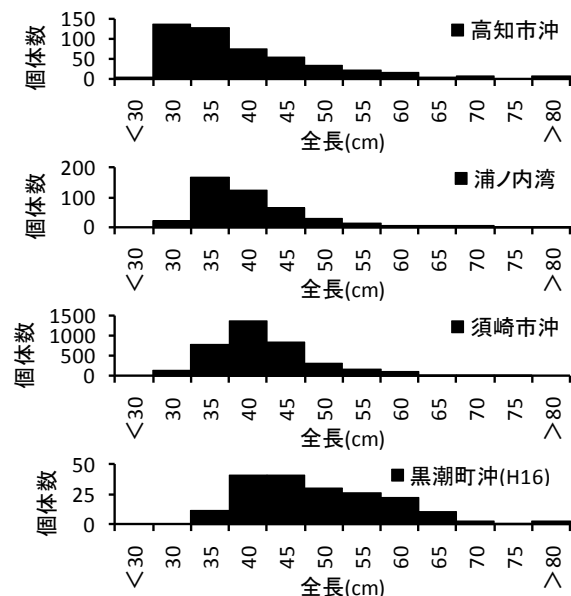


図5 土佐湾で漁獲されたヒラメの全長組成（平成16～18年）.